

東京都小中学校環境教育研究会会報

東京の青い空

第 73 号

会 長 箱崎 高之 調布市立上ノ原小学校 TEL 042-485-1271

事務局長 伊藤 修久 世田谷区立玉堤小学校 TEL 03-3521-1164

HP <http://kankyokyoiku.jp>

第 12 回世界環境教育会議 12thWEEC 報告

東京都小中学校環境教育研究会

顧問 棚橋 乾

今年の世界環境教育会議に参加する機会を得ましたので、大会の概要報告をします。

期日は2024年1月29日から2月2日まで、アラブ首長国連邦(UAE)の首都アブダビの国際展示場で開催された今回の会議には、83カ国から3131名の参加者337名の発表者があり、310回のセッションで多様な発表、パネルディスカッションやワークショップがありました。4日間は、概ね午前中に大ホールで基調講演などがあり、午後は小会議室に分かれて各自が関心のある発表に参加しました。昨年末にドバイでCOP28が開催され、同じUAEで本会議も誘致したことから、国として環境問題に取り組んでいる姿勢をアピールする狙いがあったようで、開会式には王女も参列されました。5日目はフィールドトリップで、アラビア湾沿いに広がるマングローブ林と砂漠の見学でした。

大会テーマは以下の10項目で、EE(環境教育)、ESDやCCE(気候変動教育)全般に渡った内容となっています。各発表はこれらのテーマに関わる内容だけではなく、さらに広がったように思います。

- ① 三重の地球危機に立ち向かう：気候変動、廃棄物や環境汚染、生物多様性の喪失
- ② 環境教育における水、食品、エネルギーのつながり
- ③ 目標とする持続可能性のための世界的なコミュニティ
- ④ 環境課題に取り組むための協力と学習コミュニティの推進
- ⑤ 国連生態系再生の10年における屋外および場所に基づく学習
- ⑥ 幼児教育における環境教育の取り組みと課題
- ⑦ 美術、倫理、感情の次元：環境教育における芸術とデザインの役割
- ⑧ 価値観と文化的多様性の問題：先住民の知識と文化
- ⑨ AIとスマートテクノロジー



⑩ 持続可能な未来のための環境教育

私が参加した午後の講演は、私が関心のある内容ですので、多少の偏りがありますが、いくつかお伝えします。

○南アフリカの研究者は、全体の講演でEE・ESDの評価の重要性を示され、印象深い内容でした。

○ハンガリーの研究者からは、学習者の意識調査を隣国のスロバキアとチェコの調査結果と比較しながらESDを改善する報告でした。

○アイルランドの元小学校教諭で現在はアメリカの大学の研究者の方は、小中学校の教員が教科学習の指導に追われて環境教育やESDを始めないという悩みがあった話から始めて、自身が作った教材の紹介をしていました。終了後、日本も同じような状況ですよと話したところ、頑張りましょうと励まされてしまいました。

○北米環境教育学会の方は、生徒にフィールドワークをさせるときに、現地に連れて行くが、そこでどのような活動をするのかは生徒の主体性の問題だと説明していました。正に探究学習です。

合計20ほどの講演や発表を聞いたのですが、全体を通して日本の我々の環境教育やESDの理論や実際の指導方法は、概ね同じだと感じました。ただし、諸外国には総合的な学習の時間のような学校で独自にカリキュラム編成できる時間はほとんどありません。日本にいと当たり前の時間ですが、児童・生徒の将来につながる学びを着実に進めることの大切さを再確認させられました。

次回は2026年にオーストラリアのパースで開催予定です。

第55回 全国小中学校環境教育研究大会(東京大会)報告

21世紀「環境の世紀」への提言

《研究主題》 「持続可能な社会づくりのための環境教育の推進」

～ 環境教育によって育む学力と環境保全意識 ～

東京都調布市立上ノ原小学校 校長 箱崎 高之

令和6年1月26日(金)、第55回全国小中学校環境教育研究大会(東京大会)を、品川区立環境学習交流施設「エコルとごし」を会場に対面・オンラインによる同時開催という形で行いました。4年ぶりの対面による研究大会となり、会場には、全国から約80名の参加者が集まりました。講演会では、対面とオンラインの参加者による講師の先生との熱心なディスカッションも行われました。研究発表、講演会の概要は以下のとおりでした。

【研究発表】

1 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

～環境教育によって育む学力と環境保全意識～

東京都小中学校環境教育研究会

会長 箱崎 高之

研究部長 鈴木 元

2 持続可能な社会づくりに向けて、自分の考えをもって、行動し、表現・発信する児童生徒の育成

～「世界自然遺産の島 奄美の自然・文化を生かしSDGsを目指す環境教育～」

鹿児島県大島郡字検村立阿室小中学校 校長 中村 正治

教諭 岩切 敏彦

3 河川・水教育で広げるアクティブ・ラーニング

～機関庫の川から学ぶ自分たちの生活と自然環境のつながり～

北海道帯広市立豊成小学校

校長 平野 司

主幹教諭 河村晋一郎

【講演】

東京大学 未来ビジョン研究センター 教授、国立環境研究所 地球システム領域 上級主任研究員 江守正多 様から「気候危機にどう向き合うか」をテーマに、気候変動の科学の話から始まり、リスク、最終的にその問題に我々がどう向き合っていっていいのかという話を専門的な知識や科学的なデータを基にしてお話をいただきました。また、講演会に続いて会場とオンラインの参加者から質問や意見を受け、ディスカッションも行いました。



【大会参加者の感想を一部紹介します】

- ・私はオンラインで参加しましたが、実際その場にいるような感覚で視聴ができました。また、生の声を聞くことで伝わってくるものが多くありました。
- ・初めて参会しました。地球の未来、子どもたちの未来を考える、会場の皆さんの熱意に圧倒されました。自分自身が学校で何ができるか考える機会になりました。
- ・環境教育の活動をされている学校の具体的な実践方法を学ぶことができ、とても勉強になりました。
- ・たいへん素晴らしい発表でした。授業で、子どもたちの予想外の考えに驚く先生方の気持ちに共感しました。自分の学校の生徒に、どんな授業を展開できるだろうと考えることができました。
- ・未来の気温を予測するというのが、興味深く、実践につながるものでした。また、地域環境を活かした発表は、まずは指導者が地域の自然環境に誇りをもつことで、子どもたちの学びが深いものになると思いました。
- ・江守先生のお話を子どもたちにも聞かせたい、と強く思いました。発想の転換は地球の環境を守る、というとても大きく大きな課題を前にしてとても大切なことだと思いました。教師である以前に、子どもとともに学ぶ大人でありたいなと思いました。
- ・江守先生の穏やかなお人柄と環境教育に対する熱い思い、データに裏付けられた情報など、本当に勉強になりました。地球温暖化については理解しているつもりでしたが、本当に「つもり」だったのだと反省させられました。印象的な言葉はたくさんありましたが、中でも「社会の『大転換』」、「石器時代が終わったのは……。」が心に残りました。
- ・講演は、大変興味深いものでした。分かりやすく、科学的なデータをもとに自分ごととして捉えることができ、授業でも活かしたいと考えています。

令和5年度 第55回 全国小中学校環境教育研究大会
 第59回 東京都小中学校環境教育研究発表会
持続可能な社会づくりのための環境教育の推進
 ～環境教育によって育む学力と環境保全意識～

I 主題設定の理由

これまで本研究会は、持続可能な社会への改善を試みる教材化を進め、授業実践を重ねてきた。例えば、気候変動に関する授業、食品ロスやプラスチックの廃棄等の問題についての授業、生産者視点での環境保全に向けた授業等である。

子供たちの多くは、様々な環境問題について学ぶ機会が増え、環境保全意識が高まってきているように思われる。

一方、実生活ではペットボトル飲料やファストファッションを無意識に手にしている状況にある。その現状を踏まえ、「地球温暖化」を実感している今だからこそ、地球温暖化防止に焦点をあて、授業実践を続けることでさらに環境保全意識を高めていく必要がある。

これまで本研究会が取り組んできたESDは、その実現を可能にすると信じる。それは教育の、教師の、そして児童・生徒の変容をまさに希求するものである。

II 研究の方法

- 1 役員定例会で理論構成
- 2 本研究会で作成した「新しい環境教育」でしました児童・生徒の3つの能力・態度をもとに、研究部において授業開発、授業実践を行う。
- 3 研究発表校、研究部員所属校、外部機関と連携し研究実践を深める。

III 研究の過程

- 1 学校現場でのESD推進状況の確認
- 2 取り組み可能な課題の検討
- 3 昨年度の研究の検証
- 4 地球温暖化を考えるための教材、単元開発、授業構築
- 5 研究会員の学校における授業実践（一部）
- 6 ポートフォリオによる授業検証

IV 授業実践例

中学校第2学年 地球の大気と天気の変化

「地球をとり巻く大気のように」

(1) 単元の目標

地表にあるもののすべてに大気圧がはたらいていることを理解させ、身のまわりの大気の状態を認識させる。また、身のまわりの大気の状態を継続的に観測させて、気象要素の変化と天気の変化の関係を見出させる。

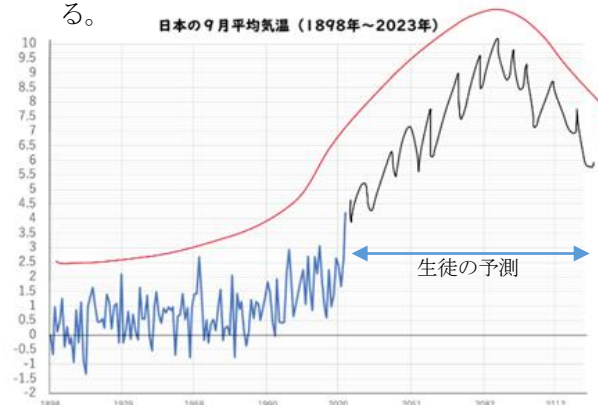
(2) 単元計画（10時間）

回数	授業名	時数
1	天気とは何か。	1
2	天気記号と天気図	2
4	異常気象とは何か。100年後の気温	1
5	地球温暖化のスピードを抑えるために	2
6	気圧と風	1
7	大気圧とは	1
8	圧力と大気圧	1

(3) 授業開発

100年後の気温を予測し、地球温暖化防止への意識を高める。

- (ア) 今年（令和5年）の気象について振り返る。
- (イ) 100年後の気温を予測する。
- (ウ) なぜその予測をしたのか考え、全体で共有する。



V 成果と課題

事前・事後の意識調査では、すべての項目において、肯定的回答率の向上が見られた。自ら予想を立てた上で、その根拠を探るための調べ学習や対策を主体的に考える授業を行ったことで、地球温暖化の防止対策に対して自分事として捉えることができるようになったと考えられる。

小学校及び中学校のどちらでも活用可能な教材を使用し、授業を構築した。その結果、地球温暖化に関する関心や知識については一定の効果が見られた。しかし、発達段階に応じて知識量の違いが大きく、より難しく捉えてしまうことがあることが浮き彫りとなった。

※研究詳細はホームページをご覧ください。

『みんなでつくろう持続可能な社会』 『みんなで守ろう豊かな自然』

第26回全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール

今夏はこれまでの夏を遥かにしのぐ猛暑となりました。環境の変化、温暖化をまさに感じ、危機感をさらに強く抱いた方も多かったのではないかと思います。そのような中、今年度も環境絵画コンクールを実施致しました。

このコンクールは、「絵を描く」という表現方法、活動を通じて環境への意識を高めることで、自分たちの行動そのものが地球環境の保全に向けての第一歩であり、影響を与えることが出来ることを意識、実感してほしいとの願いから、毎年開催しています。

『みんなでつくろう持続可能な社会』『みんなで守ろう豊かな自然』をテーマとして、文部科学省、環境省、日本環境協会の後援をはじめ、(株)みずほフィナンシャルグループ、明治安田生命保険相互会社、丸紅(株)、積水化学工業(株)の協賛をいただき、全国の児童・生徒を対象に5月中旬から9月11日までの期間で作品を募集しました。第22回から環境大臣賞の受賞作品が、環境省の環境白書の表紙絵に選定されています。

今年度は、募集期間中に、小学校の部 219 団体 2935 作品、中学校の部 290 団体 1744 作品、合計 4679 作品が、全国各地より送られてきました。また、昨年度よりも小・中学校合わせ、65 校も参加校数が増え、本コンクールの活動が全国に更に広がってきていることを実感できました。

今夏、実体験として感じた環境危機、児童・生徒の環境に対する興味関心は更に高められ、表現し、伝えていくことの大切さを、まさに感じたのではないのでしょうか。

また、昨今の持続可能な社会に対する関心が高まる中、児童・生徒を文化的・創作的な活動に導いていただく環境を用意していただいた教育行政関係者をはじめ、協賛企業、関係団体様のご支援があつてのことだと思います。本当にありがとうございました。

【応募作品について】

主に次の基準に沿って審査を行いました。

- テーマに沿っている
- 児童・生徒の意見や願いが分かる
- デッサンや構成に工夫がある
- 他の作品の模倣や類似ではない
- その他、人権上の配慮 など

児童、生徒でしか出せない、柔軟で新しい発想、技術的にも高度で丁寧に仕上げている作品も多く、何より、環境への意識の高まりや日常生活で環境問題にどのように取り組むかということを伝えようとする姿勢が伝わってきました。

審査の結果、小中学校別に、文部科学大臣賞、環境大臣賞、会長賞、みずほ特別賞、明治安田生命特別賞、丸紅特別賞、積水化学特別賞（以上各1点ずつ）、佳作（小中各10点ずつ）のほか、学校賞として大阪府吹田市千里第三小学校、千葉県流山市立南部中学校の受賞が決まりました。

【絵画コンクール表彰式の様子】



東京都教育委員会研究推進団体

東京都小中学校環境教育研究会

研究員&役員

メンバー募集

メンバー募集

メンバー募集

研究歴等は問いません！

本研究会は、1964年に創立し今年度55年を迎えます。その間、公害対策、環境教育、ESDと、それぞれの時代に合った研究内容を中心に研究と教育普及に努めてきました。私たちと一緒に、環境教育を通じて、持続可能な社会を考えていきませんか。お気軽にお問い合わせください。

<http://kankyokyoiku.jp/tokyo/>